

卷 頭 言

一九七九年三月、わたくしたちの木簡学会が発足した。そのまえの三年間、奈良国立文化財研究所が主催した木簡研究集会があった。この研究集会が発端となって学会が発足したのだった。それからもう一五年だ。研究集会のときの参加者は四、五〇人、学会発足当初の会員は九二名、いまでは二七六名である。会費は、当初から年額一万円、変わらない。高い会費だな、と最初は思った。しかし、昨今ではほかにもこの程度の会費の学会はある。

会員数が多くなった。会費もさほど高いとは思わなくなった。こんなことを書くのは、このごろ木簡学会も変わってきたな、と感じていることを云いたいからである。どう変わったか。

会則を読み返す。第三条に「本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする」とある。「木簡そのもの」とあって、やや熟さない表現になっている。これには、初代会長の岸さんの強い主張があった。岸さんが、木簡そのものを研究するのであって、木簡を史料にした歴史研究をするのではない、それは既存の学会でやればよいのだ、といった趣旨のことを強調したことを記憶している。

だが、それには無理があったようだ。かつおぶしをネコのまえにおいて、それをよく調べる、ただし、喰うな、というようなものだ。学会の夜の懇親会にでる。古代史の学会だな、と感じる。そこでとびかう話題には木簡を史料として使ったものが多い。ネコはひたすらかつおぶしを喰っている。

発足当初から保持してきた特色がいくつかある。一つは、大会で実物の木簡を前にして、それを会員で検討することだ。まさしく木簡そのものの検討である。しかし、こんな声もある。これまでこの学会は閉鎖的なまでに入会資格がうるさかった。それをもっと開いたものにしようという提言だ。この提言をまるごと否定するのではない。しかし、木簡学会を木簡に関する新しいニュースの入手にきわめて便利な組織とみる考えがそこに現れているのではないか。飢えたネコを救え！というのだ。しかし、ネコが増えると、かつおぶしを実物で検討するようなことはますます不可能になる。学会の変質は加速するだろう。

この学会のもう一つの特徴は、ネコだけの学会ではない、原料のカツオを捕まえるものやその加工業者、かつおぶし以外の喰いかたを好むものなど、そのほかいろいろの動物が集まって、いわゆる学際的な共同作業をやろう、ということにあった。どこで、どのようなところから、どのようにしてとれたカツオをどのように加工したものか、かつおぶし以外の加工法はないか、そういったことをみなで検討しようということだ。当然、中国大陸産や朝鮮半島産、あるいは横文字印のかつおぶしも比較検討の材料になるだろう。しかし、最近の新入会員はかつおぶしを喰うことを好むネコが多い傾向がある。この特色もいささかさびしくなっていく。さまざまな分野の会員を増やし、その活動を積極的にすすめることが必要だ。

かつおぶしをまえにして、ネコにそれを喰うな、よく観察しろ、と云うほうが無理なのかもしれない。しかし、史料として木簡のはたす役割り、遺物としての木簡のもつ意味、こういった問題を多面的に検討することが少なくなっているのは、やはりさびしい。それを実行するのが木簡学なのだろう。木簡学会も、木簡の記載内容を中心にしたかつおぶしを喰うための古代史研究だけの学会ではなく、木簡に付随するさまざまな属性を総合的に考究する学会でありつづけようではないか。